

障害者と健常者の境目

写真はいま使っているメガネである。右が遠近両用、左が近用ワイド。これなくして、出歩くのも、本を読むのも辛い。毎日の生活に欠かせない大切な「道具」。確か高山に引っ越した中学2年のときメガネ、眼鏡をかけ始めたと思う。それから50数年も、眼鏡にお世話になっている。



そんな眼鏡について、当たり前前の道具として、あまり考えたこともなかった。標題の朝日新聞10月21日朝刊の松井彰彦「経済季評—なくすのは私たちの意識」に、眼鏡に関する興味深い指摘があったので紹介したい。

道具という点では、眼鏡だって福祉用具だ。眼鏡は、場合によっては、あれば障害者、なければ「ふつう」の人になるという点で、政府の輸出入統計では福祉用具に含まれる。いまでこそ日本人の多くが当たり前のようにかけているが、歴史をひもとくと面白い。

「眼鏡の社会史」によると、13世紀ヨーロッパではすでに眼鏡が使用されていた。当時、眼鏡は悪魔の道具と考えられていた。「神の与え給うた苦痛は、その人間の魂の幸せのため、じっと耐えるべきものであり、それを妨げる機械類は悪魔のしわざである」

眼鏡は、本の大量生産と識字率の上昇とともに普及する。多くの人がある実用性から眼鏡を使うようになると、「悪魔の道具」としてのマイナスイメージも払拭され、大量生産の時代に入っていく。人々の意識が変わっていったのだ。

眼鏡がないと競技ができない人と、義足がないと競技ができない人との間に概念的な差異はない。障害は、社会が規定する。レームの夢はオリンピックに出場することだという。オリンピックの中に義足部門をつくってもよいと思う。夢をより大きく持つならば、オリンピックとパラリンピックの統合だってあり得るのではないか。

実用性や必需性という点でみると、多くの人にとってのペースメーカーや義肢といった障害者用の医療・福祉機器との間に、差はない。街中にかっこいい眼鏡をかけた人たちが歩くように、街中がかっこいい車椅子であふれ、かっこいい義足をつけたアスリートたちがオリンピックで活躍すれば、「障害」という言葉も人を分け隔てる意味では使われなくなっていく。社会は変わる。その社会を変えていくのは、経済発展や技術進歩だけではない。私たちの意識が、「障害者と健常者の境目」を取り除いていくのだ。

(2017年10月25日)